投稿します　SHIGE

定期健康診断でガンが発見されるのは宝くじに当たるようなものだそうですが、私の場合、その発見のチャンスをみすみす見逃してしまいました。

平成17年の6月、39歳の時の定期健康診断の血液検査で初めて貧血の値が出た事と、運転中左折した時、たまに右下腹部に軽い痛みを感じたことがガンの兆候でした。

父が肝臓癌で病死したことや体の右側の痛みということから、肝臓のエコー検査を受けましたが異状はありませんでした。総合病院の内科医からは大腸癌を疑っての便潜血反応検査の話はなく「念のため、カメラの検査をしますか」と勧められましたが、私の判断で様子を見ることにしました。

その年の12月末、大量の下血があり、上行結腸癌と診断され「覚悟して下さい、6月の時点で受診しておけば良かったですね」という医師からの話を、後日家族から聞かされた時は手遅れという状態と事態の深刻さが伝わってきました。

それから、本で貧血は右半分にできる大腸癌の症状であること、沈黙の臓器である肝臓が痛むことはまれであることを知り、大腸と肝臓の位置もわからないのかと自分を責め、体の負担が少ない便反応検査やCT検査を受けなかったことを後悔しました。

2週間後、がん拠点病院に転院し、手術を受けました。結果はリンパ節転移はないものの、癌が大腸の壁の筋肉の層の外にまで浸潤しているステージⅡでした。リンパ節の断面から転移の有無を見る検査では、癌の転移は発見されませんでした。が癌付近のリンパ節に腫れがあったため、リンパ節に転移のあるステージⅢに限りなく近い状態だったと思っています。ちなみにリンパ節全体を検査する方法はないようです。

手術は2時間程で無事終わりましたが、1週間ほど経って合併症である腸閉塞になりました。鼻から再び太いチューブを小腸まで挿入して、癒着した小腸を広げる処置でした。粘膜系統が弱い私の消化器管に激痛が何度も走り、癌の手術より百倍苦しい処置でした。あした退院という前夜、消化の悪い海老さえ食べなかったら、術後もっと歩いておけばと、「たられば」ばかりが頭を巡りました。10人に1人くらいの確率で合併症になるそうで、運が悪かったとしかいいようがないようです。それでも繰り返す可能性のある腸閉塞が一度で治ったのですから医師には感謝しています。

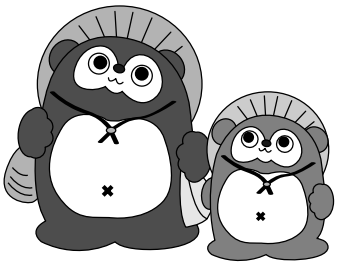
退院後、医師から経口の抗がん剤を服用するよう促されましたが、諸外国では経口の抗がん剤は効果が疑問視されて、ほとんど服用されていないためお断りしました。

あれから5年、本来なら治っていると判断される年数が経ちました。

大腸癌の場合、5年を経過していても転移癌が発見されることが時々あるそう

で、転移先は肺や肝臓が主です。この冬、1月から今日まで断続的に咳と痰が続き、一度は痰に血が混じっていましたが、しばらく様子を見てから受診しようと思っています。
基本的には、積極的に癌と闘わない生き方を選択したいと今は思っています。

投稿しようと思ったのは、同じような症状のある方に癌を疑ってもらい、早期発見の一助になればと思ったからです。
滋賀県でも患者・家族からの情報提供と、医療機関側からは丁寧な追跡調査による癌患者登録制度を普及させ、病院や医師の実績、治療方法の効果の有無などを、全国と共有できるようなシステムが必要と感じています。
最後に、日本の癌治療が放射線医療や緩和医療の分野でも、一日も早く欧米並みの水準となることを願っています。



「笑いを」友に　　A子

「笑いは最高の抗がん剤である」・・・いのちの落語：樋口　強氏の言葉です。
ご存知の方もいらっしゃると思いますが、私はとても効果があると思っています。
がんを患う前の私は、仕事と育児と家事に追われて日々苛苛し、「怒り」の感情に支配されていました。そして手術後は風の音にも怯えて涙が出るほど不安な気持ちで過ごしていましたから「笑う」事が有効だと知っても簡単にはいきませんでした。
最初はお笑い番組を見て無理やり笑っていたのですが、少しずつ笑うことを続けていくと、重かった心がチョピリ軽くなり、「笑い」を意識しだしてからは（不思議なのですが）自然と笑えるような楽しい出来事が集まってきたのです。そうなると何だか楽しくなり、どんどん気持ちが上向いてくるのが自分でもわかりました。単純ですね。
そして今年、無事に5年を迎えられました。手術、抗がん剤、周囲の人たちの温かな支えに加えて、「笑い」を友に過ごしてきた事が大きな要因なのだと信じています。
笑って下さい。免疫力をアップして、明るく楽しく行きましょう！